

◎特別寄稿

中也と高森と四季

杉山平一

中原中也の〈問い〉の深さ—出会いから今日まで

北川 透

「開館15周年を振り返って」

中原中也記念館館長 福田百合子

中原中也記念館のあゆみ

◎常設テーマ展示

「哀悼の詩—愛するものが死んだ時には」

◎特別企画展示

「『歷程』と中原中也」

◎エッセイ

特別企画展「『歷程』と中原中也」

—カエルの詩が生まれる情景—

田原義寛

◎企画展示ピックアップ

「美と痛み—大和保男の陶と中原中也—」

「中也の兄弟たち」

◎寄稿

中原呉郎先生のこと

成田 稔

日仏合同企画「フランスの旅」

福田百合子

◎記念館ニュース

入館50万人(9月)

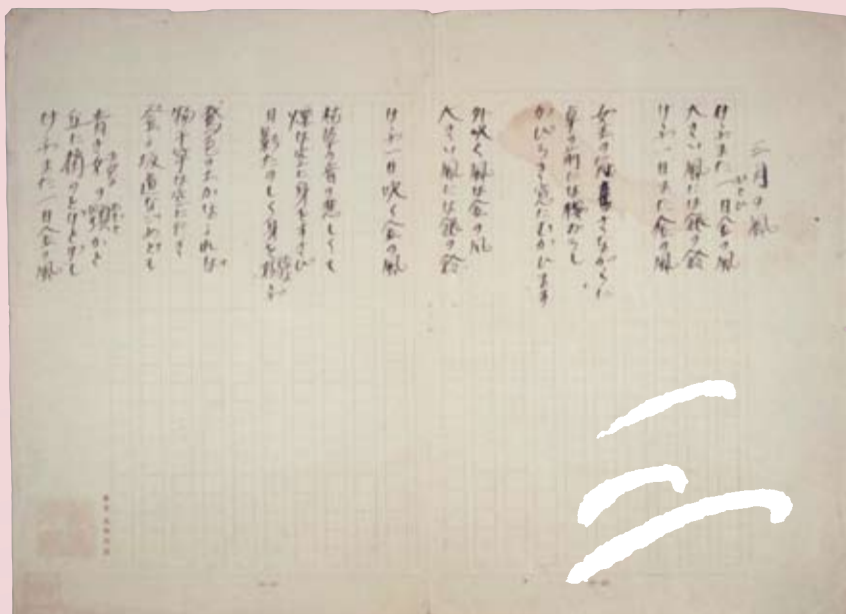
星になった中也(11月)

YUDA ART PROJECT(11月—12月)

主なできごと(平成20年度 行事記録)

第14回中原中也賞受賞作品

平成21年度 行事予定



中原中也記念館

館報2009

14

Public relations magazine

第14号

Chuya Nakahara Memorial Museum

私

が最初に触れた「四季」の創刊号に、中原中也の名が、朔太郎、犀星、堀辰雄、三好達治、丸山薫、津村信夫、などの有名詩人の中に並んでいた。続いて毎号にその名があった。一会員で投稿者に過ぎなかった私は、同人会に呼ばれる機会もなく、後に開かれた同人と会員のふれあう会で、三好、堀、津村、神保光太郎らの顔ぶれに接することができたが、中也は顔を見せていなかった。朗読会で立原道造をからかったり、毒舌の激しい人だという噂を聞くばかり、怖い人だった。

初めて中也に会った草野心平が、「四季」の第六号、詩集『山羊の歌』の書評のはじめに、「あおい丸顔の寒いその顔は、時々鬼のようなきらめきやさびしさを入りまじえてそして重く、私は一瞬深い印象をかんじた。(中略)彼は自作の詩を読んだ。その読み方にまた魅惑された」「『山羊の歌』とその著者」と書いている。その頃中也は、小林秀雄らの小説家評論家の口端にのぼっても、詩壇で取り上げられる事が無かったのに、草野は宮沢賢治や立原道造に続けていち早く中也を取り上げ、その慧眼は注目に値する。

「四季」で知り合った高森文夫が、中也の親友だったことを知ったのだが、彼は、「難破船から助けられてボートから上がってくる水夫のような青ぐらい顔」と言っていた。東大の仏文科の学生だった高森は、その故郷の宮崎へ中也を誘い、「高森、貴様、魔物だぞ！」と毒づかれながら九州を旅したらしい。「ズボンまで脱ぎ捨て、生温いビールを飲んで、朝から晩まで面つきあわせて、まるでドンキホーテとサンチョパンザじゃないか、もうごめんだ」と逃げ出した話など、後年になって聞いた。

高森文夫はその詩集『浚漂船』によって「四



特別寄稿 | Special contribution | 1

中也と高森と四季



text=Heiichi SUGIYAMA
杉山平一



季」の同人からも高く評価されていたが、中
也は「詩集 浚深船」と題して高森を評価す
る一文を、「四季」第二十九号に書いている。

「自分より早く詩を書いていた彼は、『そっと
しておいてくれ』という気持ちの強い男だっ
た。僕は高森の事を思うと、いつも一匹の美
しい仔熊を連想する。一つの詩を抜き出して
お目にかけたいが、一部を取り出すのは高森
には適当ではない。どうぞ此の落ち着いた独
特の詩集が、一般でもたくさんに売れるよう
に希望するものである」(――筆者要約)と書い
ている。この四ヶ月後に中也は亡くなるので
あるが、「今日も彼は紺の背広を着て熊のやう
にしづく」と南国の夏の町を歩いてゐるので
あらう」と懐かしんで、高森に対する中也の
優しさが溢れている文である。

その後、中也を偲んで、中垣竹之助(長谷川
泰子夫君)が四季社に資金を提供して、中原
中也賞の設立を申し出て、第一回に立原道造
が選出された。その時次第に高森の『浚深船』
が選ばれ、第二回には高森が選ばれた。

受賞当時、高森は満州にいて、後シベリヤ
捕虜収容所に送られ、戦後帰還した。

戦敗れて囚虜となり
知らぬ他国の苦役に服する
咄！ 何たる茶番だ

(「囚虜の旅」)

日夏耿之介に敍文を貰いながら、費用の工
面がつかず、そのままに日を過ごしたとい
う第二詩集『昨日の空』の、独特の文体の
一部記すと

詩集浚深船の船長が、久病の予の幻想的

な視界から、朔北斥してながく消去ったの
はいつであつたらう歎。それから渠は満州
にわたつた。中略 更に又時態は渠を、北極
星下イルクウツク府附近の令園にいく歳の
楚囚の人たらしめた。而も尚気紛れ極まる
運命は、草卒の間に渠を許して、敗残頹落
の祖国、卑屈にして貪欲、残忍にして色好
みなる修羅の巷に帰らしめた。(中略)併し、
渠は依然として昔ながらの浚深船長であつ
た。その静かなる潤ひある雙瞳は昔のごと
く凝然と動かなかつた。(中略)この謙虚な
る魂の伊吹なす詩歌を通して、その人物を
知つて、能く清歎のおもひを感じ取るであ
らう。予も亦この忘年の友のまめやかに奏
で出づる一曲流水の韻を耳にして、在りし
日の若き己のそそることを想ひ起し、かの
向秀が隣笛の感に勝へぬ。(後略)

黄眠草衣しるす

三好達治さんがある時、「僕は小林秀雄始め、
素晴らしい友人に恵まれました。小林君は少
し耳は遠いけれども」と言われた。耳が遠いと
は、詩が判らないということらしかった。

小林秀雄は中原中也の全面支持のように見
えるが、三好達治の中原観はどうだったのか
と、興味のあるところだ。あるところで三好達
治は『在りし日の歌』の「六月の雨」を激賞し
ている。

お太鼓叩いて 笛吹いて
あどけない子が 日曜日
畳の上で 遊びます

という畳の上という視点を襲っていた。

在りし日の我が子を偲ぶ哀切感と、絶えず
出てくる育ちの良い子供の、幼児性が、生きて
いる。

小林秀雄は、中也の詩碑に「帰郷」一篇刻ん
でいるが、「これが私の故里だ／さやかに風も
吹いてゐる」に続く「心置なく」と「年増婦
の…」を省いて、

あ、おまへはなにをして来たのだと……
吹き来る風が私に云ふ

を刻んで、中也像をくつきり伝えている。

この言葉は、ヴェルレーヌの『叢知』の、永
井荷風の名訳とびつたり照応している。

語れや、君、そも若き折

何をかなせし。(無題)

照応といえ、中也ファンに愛される「月夜
の浜辺」のボタンが、森鷗外の『うた日記』の
「扣鈕」(南山の たたかひの日に／袖口の
こがねのぼたん／ひとつおとしつ／その扣鈕
惜し)と対応して、詩人としての鷗外に、中也
を貫く幼児性のもつ詩人性が美しい。

弱き身の、弱き心の
強がりには、猶おぞましけれど
怨せかし 弱き身の
さるにても、心なよらか

(「修羅街挽歌」其の二)

とか

僕が、妥協的だと思つては不可ない
僕は、妥協する、わけではない

僕には、たくらみがないばかりだ
僕の心持は、どう変りやうもありはしない

つまり、中也は優しい人なのだ。
初期の「臨終」などを、はじめは軽く見過ご
していたが、伊東静雄さんからあれは絶唱だ
といわれて、読み返す程に深く心打たれた。

私は、学生時代本郷の下宿にいたが、同じ下
宿で一人の若者が死んだ。その死の間際に、宿
の主人が親元か友人に知らせようと言つたの
に、誰も呼ばないでくれと言つたというのを
聞いていたので、「臨終」の

神もなくしるべもなくして

窓近く婦の逝きぬ

の詩句が胸に沁み

窓際に髪を洗へば
その腕の優しくありぬ

の、腕の優しくというのが何度読んでも忘れ
られない。

中也の優しさは、怖いどころか幼児そのま
まの柔らかさを、遠慮のない不器用さが相手
を傷つけたのだと思う。

伊東静雄が上京して、初めて中也と会食し
た後、「遠来の客が先に支払うのがしきたりで
す」と中也がいうので、渋々払ったが、今度は
中也に払わしてやる、と機嫌が悪かったとい
う。

多彩で自在で読み証するのが難しい中也の詩
で、私がつかりにしたのが「冬の日の記憶」
だった。その巧みな客観的な視点のある物語
性だった。

昼、寒い風の中で雀を手にとつて愛してゐた子供が、

夜になつて、急に死んだ。

次の朝は霜が降つた。
その子の兄が電報打ちに行つた。

それから母親は泣き、父は遠洋航海、雀の行方、中也の好きな北風の空白、につづいて、父からの返電、そうして、

電報打つた兄は、今日学校で叱られた。

とさわやかに締めくくる巧みである。

それは、「生ひ立ちの歌」の「私の上に降る雪は／真綿のやうでありました」にはじまり、吹雪のクライマックスに発展し、しめやかな静けさでしめくられる。

それはまた「汚れつちまつた悲しみに……」の羅列し折れたたみ行く巧みさ、反復の妙となつて心を打つてくる。

それは、「老いたる者をして」の

あ、はてしもなく涙かんことこそ望まされ
父も母も兄弟も友も、はた見知らざる人々
をも忘れて

東明の空の如く丘々をわたりゆく夕べの風の如く
はたなびく小旗の如く涙かんな

或はまた別れの言葉の、こだまし、雲に入り、
野末にひびき

海の上の風にまじりてとことには過ぎゆく
如く……

それは、「盲目の秋」の

それはしづかで、きらびやかで、なみなみと
湛え、
去りゆく女が最後にくれる笑ひのやう
に、

巖かで、ゆたかで、それでゐて侘しく
異様で、温かで、きらめいて胸に残る……

層々と畳みかけ、更には、

これがどうならうと、あれがどうならうと、
そんなことはどうでもいいのだ。

ういふことであらうと、
そんなことはなほさらどうだつていいのだ。

ルフランの魅力いっばいの迫力は、日常の
俗語の駆使によつて冴え渡る。

「妹よ」の
夜、うつくしい魂は泣いて、

死んだつていいやう、死んだつていいやう、
と、
うつくしい魂は泣くのであつた。

この「かの女こそ正当なのに」「死んだつて
いいやう」の語調が、何年経つても頭にこびり

ついてしまつてゐる。

さらには、正当などアタリキシャリキの職人言葉に及ぶ風俗語の数々は、ベトちゃんなどど失敗作もあるが、大人が子供向きにつかういやらしさがないのは、育ちのいい幼児性がそのまま「地」と化しているからである。

最も有名な「ゆあーんゆあーんゆあーん」
（「サーカス」など、擬態語の傑作で、朝太郎のにわたりの「とをてくう、とをるもう」（「鶏」）やゼンマイ時計の「じぼあん・じやん」（「時計」）に劣らぬ面白さである。

擬声より擬態語が多いが「ボツカリ月が出ましたら」（「湖上」）など俗語もいところと軽蔑していたが、ある時、森繁久弥の朗読を聞いて、涙が出てきて我ながら不明を恥じたことがある。森繁は最後の行を一度リフレインして読んでみせた。

「月の光のヌメランとするま、に」（「春の日の夕暮」）「ホラホラ、これが僕の骨だ」（「骨」）「ポロリ、ポロリと死んでゆく」の他、文語、古語のあやしい使い方、「ひねもす」（「春と赤ン坊」）、「きみはありにし」（「含羞」）、「倦んじてし」（「朝の歌」）、「流れてありにけり」（「冬の長門峡」）など、それは魅力となつてゐる。
解釈など受け付けない存在そのものが詩人だつた人なのだ、という気がする。

中也と高森と四季



◎プロフィール

杉山平一（すぎやま へいち）
詩人・映画評論家。帝塚山学院大学
名誉教授。

大正三（一九一四）年、福島県会津若松市生まれ。東京帝国大学（現東京大学）文学部美学科卒業。
詩誌「四季」にて三好達治に認められ、同人となる。昭和十六（一九四一）年、「四季」主宰第二回中原中也賞受賞（高森文夫と同時受賞）。昨年、昭和十八年刊行の第詩集「夜学生」（第十回文芸汎論詩集賞受賞）が竹林館より新装改版され話題となつてゐる。



特別寄稿 — Special contribution — 2

中原中也の 〈問い〉の深さ

—— 出会いから今日まで

text=Tohru KITAGAWA
北川透

平成二十年九月、北川透さんの『中原中也論集成』（思潮社）が第四十六回藤村記念
歴程賞を受賞しました。未刊の評論集「中原中也の可能性」に加え、既刊の『中原中
の世界』、『中原中也 わが展開』の二冊を合本にした、七五〇頁にも及ぶ大著です。

現在の中原中也研究において中心的な役割を担い、同時に中也と同じ「詩」という
分野で、実作者としても活躍される北川透さんに、いくつかの質問をし、それに答え
るかたちで詩人・中原中也に寄せる思いを綴っていただきました。

中原中也の詩との出会いはいつ？
最初の印象は？

ぼくはいまから五十七年位前に、愛知県の碧
南高校というところで学びましたが、そこは文
芸部や演劇部の活動が盛んで、優れた詩を書く
同級生が何人かいました。その影響でぼくもい
つか詩に関心を持ったのだ、と思います。二年
生になってから、高校の図書館で見つけた近代
の詩や詩集を、片端から読んだ記憶があります
が、ほとんどは難解で歯が立たないか、自分の
好みに合わなくて好きになれませんでした。そ
の中でただ一人、中原中也の詩だけは、難しい
かどうかに関係なく、なぜか自分の気持ちにびつ
たりして、繰り返し読むということが起こりま
した。後になって、筑摩書房版の中原中也詩集
を買いましたが、初めは好きな詩をノートに書
き写したり、暗唱したりして、ひとり慰められ
ていました。その結果、十数篇の詩は楽に暗唱
できた、と思います。それは中也の詩を模倣し
て、友人たちと競うように、詩を書き出した時
期と重なります。決定的だったのは、安原喜弘
著『中原中也の手紙』（旧書肆ユリイカ）を読ん
だことです。三年生の秋になって、ようやく大
学進学の方針が立ち、碧南市立図書館に受験参
考書を借りに行った際に、当時のことで、詩集
や詩の本などまったく見当たらない書棚に、この本だけ
がひっそりと置かれていたのです。受験参考書
などおっぼり出して、この本に映し出されてい
る中也の不幸な境遇に魅惑されていた、あの狂
い立つような数日のことが、今もまざまざと思
い出されます。

中也の詩を鑑賞するだけでなく、
批評の対象にした理由は？

たぶん、一度、中也の詩と切れたことがあつ
たからでしょうね。大学に入って、二年生の中
ごろから、ぼくは周囲の友人たちに誘われて、
だんだん学生運動の渦中に入ってゆきました。
むろん、一九五〇年代の半ばごろの学生運動は、
その後のような政治的に激しいものではなく、
文化運動のようなものでした。ぼくは教育系の
全国学生ゼミナール運動の中心的な位置にい
たこともあり、しかし、そうではあっても、
政治とかかわりのある世界であることは確か
で、その中では中原中也が好きだとか、その詩
を暗唱できるといふようなことを、口に出して
言えない雰囲気がありました。自然と中也を読
まなくなり、詩も忘れていきました。しかし、
矛盾するようですが、ぼくは大学に入ると
すぐに日本文学協会に入っていて、その名古屋
支部の責任者でもある文芸評論家の丸山静さ
んの影響で、次第に明治の詩人・評論家の北村
透谷に関心を持ち出していました。その結果、
透谷で卒業論文を書く破目に陥りました。その
関係もあって、内外の哲学、思想書、評論集な
どを沢山読みました。透谷の文学や思想につい
て考えることが、学生運動の指導理念を支えて
いたマルクス主義やスターリニズムなどへの、
深い懐疑と次第に結びついてゆきました。そし
て、大学卒業後、豊橋で私立高校の国語の教員
になった頃、いわゆる「六〇年安保闘争」に遭
遇します。この敗退を契機に、ぼくは左翼的な
潮流と決別しました。その思想的な混乱の中で、
勤め先から帰ると、毎晩、ドストエフスキーの
小説を読んでいました。そこでようやくぼくの
中に詩が甦り、「荒地」の詩人や吉本隆明、黒田
喜夫、吉岡実、谷川雁等の戦後詩への強い関心
が生まれてきます。友人たちと同人雑誌を出し、

そこへ詩や詩への批評を書き出しました。その頃でした。勤め先の高校の図書館に、佐藤泰正著『近代日本文学とキリスト教・試論』（基督教兄弟団、一九六三年刊）を見付け、その中の中原中也論を読み、深い感銘を受けたのは……。そうした広い意味の批評的な関心の中で、中原中也も再び、ぼくのなかに復活してきたのです。しかし、一九六七年、村上一郎さんが、紀伊国屋新書の一冊として、『中原中也の世界』を書くことを勧めて下さらなければ、ぼくの内部での中也の復活も、確かなものにならなかったでしょう。

中也の詩がファンだけでなく、
詩人、批評家、作家などの実作者にも、
大きな影響を与えているのは、
なぜだと思えますか？

影響がしばしば詩の語法とか、語彙の模倣に始まるのは当然ですが、そこに留まっている限りは消えやすいものだ、と思います。ぼくの場合もそうで、本当の中也の影響は、六十年代の初めに明けても暮れても、ドストエフスキーを讀んでいた時に起こったのではないかと、いまでは考えています。その時に、たまたま中原中也の日記の中に、ドストエフスキーの『地下生活者の手記』について触れた感想を眼にしました。このことは『中原中也の世界』の「序説」にも書いているので、詳しくは触れませんが、地下生活者の原型になっている、ドストエフスキーの十七歳の頃の兄に当たった手紙の文面に見られる精神の型が、中原中也のそれと近いと感じたことが、中也に再度深入りする契機になったのではないかと、思います。というのは、この頃、書いたばかりの最初の中原中也論、その正

確な題名も、発表誌も忘れてしまいました。が、

「地下生活者の詩、中原中也」というようなものだったからです。十七歳の少年ドストエフスキーは、手紙の中で「完全な怠惰といふものが、この世での僕の宿命だ」、「人間とは法則に矛盾する様に創られた子供だ」、「僕には一つの計画がある。狂者となる事」と書いています。ダダイズムの洗礼を避けられなかった中也のことばのように、これを聞いてしまったんだ、と思います。大岡昇平さんはぼくの中也論の性格を、かつて「タダイズム重視」と指摘されましたが、そのぼくの偏向の根はここにある筈です。この精神の型が、ぼくの意識の深部に働いた中也の本質的な影響だ、と思います。むしろ、これを一般化できないことは当然ですが、中也の詩の魅力から、精神の深部に働きかけられているという点では、他の実作者も違いないでしょう。

この度、『中原中也論集成』が、
藤村記念歴程賞を受賞しました。
その感想は？ 中也との出会いを
〈宿命的〉だと感じられますか？

ぼくにはこれまで『中原中也の世界』（一九六八年刊）と、『中原中也わが展開』（一九七七年刊）という二冊の中也論がありました。当初は、この二冊以後の三冊目のそれを『中原中也の可能性』として出す、という企画でした。しかし、編集の段階で、この三冊を合冊として出すという考えが、出版元（思潮社）から出てきたのでした。全部で七五〇頁にもなる大冊が商業出版として成り立つかどうか、ぼくは余計な心配をしましたが、二冊目が絶版状態だったので、有り難くお受けすることにしました。これが何かの賞の対象になるなど、思ってもいない

ことでした。そのことで僅かでもこの本が注目され、その結果、中也の詩がいつそう多くの人に読まれることになれば、そんな嬉しいことはありません。

ぼくが少年時代に中也の詩と出会ってから、五十六年程が経ちました。その中には、学生時代を中心に読まなかった期間があります。その後、最初の中也論を書いてから、四十年が経ちました。その期間でも、二冊目を書いてから十数年、中也について書かなかった時期があります。そうした二回の中断を挟んでいます。ただ長い間、中也と付き合ひ、沢山の論を書いた上に、この『集成』を出してからも、また、書き続けています。この中也との、終わることのない親密なかわりを見れば、中也との出会いが〈宿命的〉でなかったとは言えません。しかし、その意味を別に言えば、中也の詩が孕んでいる〈問い〉の容量が、容易には汲みつくせないほど深く広いということです。ぼくが詩を書いたり、現在の詩や思想について構想したり、批評を書いたりする上で、彼の詩の孕んでいる〈問い〉はいつも大きな力、あるいは根拠を与え続けてきましたし、それはこれからも変わらないでしょう。中也は三十歳で夭折し、詩が書かれたのは僅か十年間ほどです。その中也の詩のどこに、そんな力があるのか。それは眩暈を覚えるほど不思議です。

中也の詩の〈問い〉の深さは
どこから生まれてきている？

それを先ほどの十七歳のドストエフスキーに関連させて言えば、中也の精神の病、損なわれた精神の深さからです。これがなぜ深いかという、そこに日本の近代の歴史がもつアポリ

アのすべてが集約されているからでしょう。しかし、それだけでは中也の詩の魅惑は見えてきません。病が詩のこぼれに魅惑や喜びとして結晶するためには、尋常な努力を超えた特別な「労働」が必要です。中也はランボー、ヴァレリーはじめ、沢山のフランスの詩の翻訳という難事業をしました。その翻訳のレベルが優れているかどうかを超えた問題は、そこに中也が自分の存在のすべてを投げ入れることで、世界の詩や文学のレベルで詩を書く条件を可能にした、ということだと思います。彼が小学校の頃から短歌を書いていた、その伝統詩の感性、語彙、語法が、最初に衝突したのが世界の詩の最先端であり、末端でもあるダダイズムであったことは、やはり特記すべき象徴的な事件でした。中也の詩の〈問い〉は、いつもこの世界の詩と伝統詩の両方から来る視線の間で揺れ動いていたからです。（2009年1月21日、中原中也記念館の敷田由梨さんの質問に答えて。）

◎プロフィール

北川 透（きたがわ・とほる）
詩人・文芸評論家。梅光学院大学特任教授。

昭和十二（一九三五）年、愛知県生まれ。現在、下関市在住。

詩集に『魔女的機械』（自立社）、『窠変論』（思潮社）等、詩論集に北村透谷、萩原朔太郎、中原中也、戦後詩に関するもの多数あり。昨年、詩集『溶ける、目覚まし時計』（思潮社）で第三十八回高見順賞受賞。

開館十五周年を振り返って

text=Yuriko FUKUDA
福田百合子

平成6年2月の中也記念館開館から平成21年の今年、丸15年、本当にあつという間に過ぎたような気がします。その年の1月1日、まだ山口県立女子大学に在職のまま、当時の山口市長佐内正治氏から、初代館長の辞令をいただきました。早くに恩師太田静一教授の中也研究演習に参加してはいましたが、思いがけない展開で、戸惑いも大きかったのです。

市から出向の副館長福田祥介氏、総務担当和木浩子さんに全面的に頼つての毎日でした。中也賞、中也の会、「中也研究」など、次々に応援団の輪も広がって、中原家の美枝子夫人、ハーモニカの伊藤拾郎氏とのお付き合いも深めることが出来たような気が致します。お二人が同い年で、同じ年に続けてお亡くなりになったのに、強い衝撃を受けました。

福田祥介氏から、真砂義明・中村千里・岡村萬利雄さんと、次々有能な方々に支えられて記念館の運営は軌道に乗りました。那須香さんは初期段階から事務と学芸両面に涉つてご尽力下さいました。高尾亜紀さんはじめ、多くの職員、その他の方々のサポートは言うまでもありません。

日本近代文学館との連携も中村稔理事長の強力なご鞭撻の賜で、歴代学芸員の研修、資料の収集保存面で啓蒙されたことは何よりの宝となりました。新収蔵庫・分館の新築にも繋がったのです。紀宮様のご来館もありました。

開館10周年に当り、本館の内部改築案が実現し、長崎大学から近代専攻の中原豊氏を迎えて工事が進められたのは有難いことでした。10周年はすぐに平成19年の中也生誕百年祭へと移って記念事業実行委員会が立ち上げられたのです。地元の商工会や旅館組合の皆様方の参加を得て、地域との融和を実感する行事の開催でした。道を隔てた山口銀行旧湯田支店の空き店舗を借りての展示・グッズ販売・軽食喫茶も懐かしい限りです。情報芸術センター隣接地のサーカス小屋のテントに連日通つたものです。

国民文化祭の年、皇太子様の記念館へのご見学も忘れられません。「美智子様から「子守唄よ」を読んで貰いました」とのご感想に驚き、「骨」の解釈に驚天し、新発見ばかりでした。個人的なことで恐縮ですが、その夏、秋田駒ヶ岳登山で転落、骨折。手術、入院中で、車椅子でのご案内だったのです。更に翌年には、元気になったことを喜んでいただきました。

山口市との友好関係で、中国、スペインのナバラ州・ハビエル城、パンプローナ、ポルトガルや福島市へ。山口県移民記念でブラジル・ペルーへ。昨年は、しめくくりのように、ランポー記念館との交流、シャルルヴェル・メジエール市との友好の為に、中也の会の皆さん方とフランスを訪れることが出来ました。傘寿、叙勲と重なり、多くの方のご恩を改めて感謝の気持ちで振り返る開館15周年の年です。本当に有難うございました。

昭和61(1986)年 山口市で中原中也没後50年のイベント開催

平成4(1992)年 3月 生家跡に記念館を建設することが決定

平成6(1994)年 1月 福田百合子(当時・山口女子大学教授)が館長に就任
 2月17日 開館記念式典 18日 一般公開
 4月 「中原中也生誕90—3年祭」開催(平成DADA実行委員会主催)
 第1回運営協議会開催
 10月 開館記念行事「汚れつちまつた悲しみに……」(俳優座公演)
 11月 特別展示「中也の軌跡」開催

平成7(1995)年 2月 開館一周年記念「伊藤比呂美ライブ」開催
 (平成DADA実行委員会・ぶちええ山口を広める会・記念館共催)
 9月 文学バスツアー「金沢・京都 文学の旅」開催
 10月 入館者10万人達成

平成8(1996)年 2月 第1回中原中也賞決定(山口市主催)
 3月 「中原中也記念館館報」創刊号発行
 機関誌「中原中也研究」創刊号発行
 4月 財団法人山口市文化振興財団発足
 9月 中原中也の会発足 第1回総会、創立記念大会、文学散歩開催
 10月 第1回公開講座開催

平成9(1997)年 2月 前庭拡張、分館建設工事完成
 4月 中原中也生誕90年祭(平成DADA・記念館共催)
 「私の好きな中原中也の詩 1,000人アンケート」募集開始
 9月 中原中也の会・生誕90年記念大会
 「復活・スルヤ演奏会'97」(スルヤ実行委員会・記念館共催)
 10月 全国ボランティア大会、紀宮様行啓
 『天使の手帖』(1,000人アンケート記録集)発行

平成10(1998)年 1月 入館者20万人達成
 4月 中也生誕91年「小さなお誕生会」
 11月 公共建築百選に選定

平成13(2001)年 2月 展示検討委員会開催
 入館者30万人達成

平成14(2002)年 4月 詩のボクシング山口大会

平成15(2003)年 3月 新収蔵庫完成
 12月1日 展示室リニューアルのため休館

平成16(2004)年 2月22日 リニューアル記念式典、オープン
 第1回テーマ展示「中也愛の詩—長谷川泰子をめぐって」
 2月23日 開館10周年記念コンサート開催(於・山口市民会館)
 中原家で保管されていた中也直筆原稿が中原家から寄贈される
 4月3日 中原中也直筆原稿寄贈に伴う一般公開(於・ホテルニュータナカ)
 9月 入館者40万人達成

平成18(2006)年 11月 国民文化祭、皇太子殿下行啓

平成19(2007)年 4月 中原中也生誕百年記念事業「空の下の朗読会」
 5月 中原中也生誕百年記念事業「サーカス小屋でコンサート」
 7月 生誕百年特別企画展「小林秀雄と中原中也」
 10月 中原中也生誕百年記念事業「“子守唄よ”—中原中也をめぐる声と音楽のファンタジー」

平成20(2008)年 3月 中原中也生誕百年記念事業ファイナルイベント「みなさん、今夜は、春の宵。」
 9月 入館者50万人達成
 12月 中原中也の会日仏合同企画、シャルルヴィル-メジエール市のランポー記念館と交流

平成21(2009)年 2月18日 開館15周年

1986

1994

2003

2009



哀悼の詩

愛するものが死んだ時には

Chuya Nakahara Aito no Shi

平成21年2月18日(水)～平成22年2月7日(日)



展示風景

人々の死に直面しましたが、彼は、他者の死がもたらす喪失感を、詩人として作品に昇華していきます。それらの詩は、私たちの心の奥底を揺り動かし、深い感銘を与えます。

この展示では、中かが身近な人々の死をどのように受け止め、そこから、どのような詩が生まれてきたのかを中心に、直筆原稿を通じてご紹介しました。

1、哀悼、詩のはじまり

大正四年の初め頃だったか終頃であったか
兎も角寒い朝、その年の正月に亡くなった弟
を歌ったのが抑々の最初である。

中かが29歳の時に、詩人としての半生を履歴書の形式で綴った「詩的履歴書」。その冒頭に置かれた一節です。4歳で死去した弟の重郎を歌ったことが、詩人としての生涯のはじめに位置づけられています。

哀悼とは人の死を悼み哀しむことですが、中世の詩にとって、それはとても重要な意味を持っています。

私たちは生きていく中で、様々なかたちで他者の死と向き合います。中世も、7歳にして次弟の重郎(通称あるう)を喪なって以来、様々な

2、恰三

その後、中世は100首を超える短歌と350篇を超える詩を残しましたが、そこには哀悼やそれに関わる内容をもつ作品が数多く見られます。ここでは詩「断片」「梅雨と弟」の直筆原稿などを通じて、中世の哀悼の詩を幅広い視点から紹介しました。

恰三は、明治44年、中原家の三男として広島で生まれました。昭和5年、日本医科大学に進学。詩の道に進んだ兄、中世の代わりに、中原医院の後継者として期待されましたが、大学在学中に外傷性肋膜炎を発症し、昭和6年9月、19歳で死去。この弟の早すぎる死に、中世は強

い衝撃を受けました。

ここでは中世の詩作ノート(「早大ノート」)に書かれた詩「死別の翌日」や、恰三の戒名をそのまま題名とした詩「秋岸清涼居士」の直筆原稿などを通じて、恰三へ向けた哀悼の詩を紹介しました。

3、文也

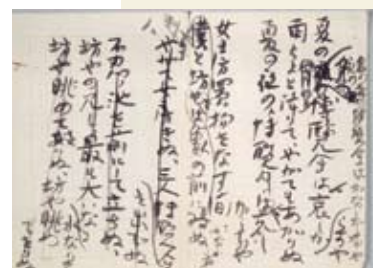
文也は、昭和9年10月、中世の長男として山口に生まれました。文也との生活は、中世の詩にも影響を与えました。誕生の翌年からは、子どもの登場する詩が増えますが、我が子をいつくしむといった内容は少なく、子どもを不可思議なイメージの中に置いた詩が多いのが特徴的です。

しかし、昭和11年11月、それまでの順調な成長ぶりから一転、小児結核により2歳で死去。中世は、「また来ん春……」のような追悼詩だけでなく、「冬の長門峡」や「春日狂想」など、間接的に文也の影を感じさせる詩も数多く書いています。中世の第二詩集「在りし日の歌」には、扉裏に「亡き兄文也の霊に捧ぐ」という献辞があり、そして「永訣の秋」というパートが設けられ、詩集の構想と文也の死との深い関わりを示しています。また、文也の死後、「雪」のモチーフを用いる回数が増えますが、それは、文也への想いと「雪」のモチーフとの結びつきを思わせます。

ここでは、展示を《愛児の誕生と死》《哀悼の雪》《冬の長門峡》《春日狂想》の4つのパートに分け、詩「吾子よ吾子」「雪が降つてゐる……」「夏の夜の博覧会はかなしからずや」「冬の長門峡」の直筆原稿などを通じて、文也への哀悼の詩をご紹介しました。



「冬の長門峡」直筆原稿



「夏の夜の博覧会はかなしからずや」直筆原稿

「冬の長門峡」と文也

中世は、日記や原稿を書く際、普段は万年筆を使用していました。その中かが敢えて毛筆に持ち替えて書いたことが、それは文也死去の記事でした。その記事から2ヶ月後、同じ日記に毛筆で「文也の一生」と題された回想記が書かれました。愛児にまつわる思い出が時を追うように書かれ、昭和11年7月に上野で博覧会を観たところで終わっています。その思い出をもう一度なぞるように書かれた詩が「夏の夜の博覧会はかなしからずや」です。そして、その詩の推敲が終了した後、後に続けて「冬の長門峡」が書かれたと考えられています。

「冬の長門峡」には、直接的に文也の面影を思わせるところはありません。しかし、「文也の一生」から続いてくる筆の勢い、「夏の夜の博覧会はかなしからずや」から続く、完了の助動詞(ぬ)と過去の助動詞(き)の多用が、亡き子への想いと連続性を感じさせます。

『歷程』と 中原中也

平成20年7月30日(水)～平成20年9月28日(日)



展示風景

昭和10年に創刊し、現在も発行を続ける同人詩誌「歷程」。中原中也は創刊時より同人に名を連ね、10篇の詩と2篇の評論を発表しました。中也を「歷程」に誘ったのは詩人の草野心平です。心平は、時代に先んじて中也の詩を深く理解し、その才能を認めていました。展示では、心平と中也の出会いと交友、「歷程」創刊までの紆余曲折、高橋新吉、宮沢賢治、尾形亀之助ら個性的な同人たちと中也との関係など、さまざまな観点から、「歷程」という場に集った若き芸術家群像を紹介しました。

展示1 「歷程」創刊

——「歷程」の鼓動は止まらなかつた

（草野心平「歷程」通巻4号 後記）

「歷程」創刊よりさかのぼること約半年、中原中也は麻布の龍土軒で開かれた自作詩朗読会（「歷程」の会）で「サーカス」を朗読しました。その会の主催者の一人であった草野心平は、中也の人間性と朗読に魅了され、以後深い交友を結ぶこととなります。

そして、昭和10年5月に、心平、中也、岡崎清一郎、尾形亀之助、高橋新吉、菱山修三、土方定一、逸見猶吉、それに物故同人の宮沢賢治を加えた9人で「歷程」はスタートします。しかし、第1号を出したところで早速中断。10ヶ月後再び創刊号を出しますが、今度は2冊目を出したところでもまたや中断。再々創刊号が出たのは、それから半年後のこと。結局3回もの「創刊号」を出すことになりました。それでも「歷程」が続いた理由の一つとして、草野心平の尽力があったことは特筆すべきでしょう。心平が同人の岡崎清一郎に宛てた手紙からは、何度廃刊の危機に立っても、決してあきら

めず前進し続けた心平の力強い意志と行動力が伝わってきます。

一方、中也の日記などからは、一歩引いたところから「歷程」に関わろうとしながらも、心平のバイタリティーに引きこまれていく中也の姿が垣間見えます。

ここでは、中也が朗読をした「歷程」の会から、「歷程」の創刊、その後第3次創刊までの紆余曲折を紹介しました。また、昭和49年に録音された心平の中也詩朗読が聴けるコーナーを設けました。

《主な展示資料》

中原中也直筆原稿「童女」「深更」、中也日記（雑記帖）、草野心平筆岡崎清一郎宛書簡

展示2 心平と中也

——草野君の感覚を僕は好きだ。

そのポイントは実に正確だ。

（中原中也「草野心平詩集『母岩』」）

心平と中也の交友は「歷程」同人という枠を超え、様々なかたちを見せています。心平は早くから中也の詩を高く評価し、中也の詩集「山羊の歌」が出版されると書評を書きました。一方中也も、心平の詩集「母岩」の書評を書いています。そこには、心平の詩人としての感覚に対する信頼が語られています。

また、中也が詩集「山羊の歌」の装幀を高村光太郎に頼みに行く際、心平は仲介者として同行、光太郎は無償で装幀を引き受けました。その礼として大きなチーズを光太郎に贈った中也の律儀さを、心平は後に回想しています。

心平といえば蛙を主題とした作品を多く発表し、「蛙の詩人」として有名ですが、中也も「蛙声」をはじめ、数篇ですが蛙の詩を書いて

います。それらを比較すると、詩作上の資質の違いがよく分かります。

ここでは、心平と中也の交流について、また心平と中也の蛙の詩を並べて紹介しました。

《主な展示資料》

中也ノート（ノート翻訳詩）、心平直筆原稿「月の出と蛙」「ぐりまの死」など、心平画「春殖」

展示3 「歷程」の同人たちと中也

——「クラムボンはおぼかおぼらつたよ。」

「クラムボンはおぼかおぼらつたよ。」

（宮沢賢治「やまなし」、「歷程」通巻3号掲載）

「歷程」同人たちは、猶吉と心平の勧誘により集ったわけですが、同人同士の個人的なつながりもありました。なかでも中也と「歷程」同人たちとの関係はそれぞれに興味深いものがあります。高橋新吉や宮沢賢治は10代の頃からその詩に親しんでいましたし、新吉とは直接の交流もありました。尾形亀之助は中也と親交があったわけではないですが、ともにダタイズムなど20世紀初頭のアヴァンギャルド芸術から深い影響を受けたことでは近い詩人といえるでしょう。逸見猶吉とは同じ明治40年生まれ、若い頃にフランスの詩人アルチュール・ランボーから深い影響を受けた点も共通しています。

ここでは、「歷程」創刊同人と中也のさまざまな関わりについて、中也の日記や同人たちの自筆原稿などを交え紹介しました。

《主な展示資料》

尾形亀之助直筆原稿「辻は天狗となり 善助は堀へ落ちて死んだ 私は汽車に乗って郷里の家へ帰つてゐる」、尾形亀之助筆岡崎清一郎宛書簡、宮沢賢治「春と修羅」

展示4 中也と「歷程」

—海にゐるのは、／あれは人魚ではな
いのです。／海にゐるのは、／あれ
は、浪ばかり。

(中原中也「北の海」)

中也は昭和12年10月に死去するまでに発行された「歷程」(通巻1〜5号)全てに作品を発表、草創期の「歷程」主要同人の一人でした。また、発表した10篇の詩のうち、「北の海」「お道化うた」「閑寂」「冬の明方」「あばずれ女の亭主が歌つた」の5篇が『在りし日の歌』に収録されました。中也にとつて「歷程」は「四季」「文学界」に次ぐ重要な発表誌だったので

す。
ここでは、中也が「歷程」に発表した詩と評論を、それらに関連する資料とともに紹介しました。3号掲載の「お道化うた」の中のピアノを弾く話は、詩の制作当時は教科書に載る程よく知られていた、ベートーヴェンのピアノ曲「月光」にまつわる伝説を指しています。そこで展示では、その伝説が収録された大正時代の教科書を展示し、詩と伝説を比較できるようにしました。

《主な展示資料》

中也ノート(「早大ノート」、中也所蔵レコード、「歷程」中也作品掲載号(通巻1〜5号))

展示5 その後の「歷程」

—中原よ。／地球は冬で寒くて暗い。
／／おや。／／さよなら。

(草野心平「空間」)

中也の死後、およそ1年半が過ぎた昭和14年4月、「歷程」(通巻6号)で中也追悼特集が



組まれ、心平、光太郎をはじめ5人が追悼文を寄稿しています。また、その号に載った高田博厚制作の中原中也ブロンズ像の写真は次号(通巻7号)の表紙を飾りました。それらは「歷程」における中也の存在の大きさを物語っています。

「歷程」は昭和19年3月に通巻26号を発行したところで一度中断しましたが、昭和22年7月に復刊、通巻50号を超え、現在も発行を続けています。

ここでは「歷程」創刊同人たちの追悼特集号や、心平の中也追悼詩「空間」の書、中也の死から40年以上経た後に書かれた心平の詩「その死の前後の回想 中原中也」などを紹介しました。

《主な展示資料》

心平書「空間」、心平日記、「歷程」中也ほか創刊同人追悼特集号・通巻50号



草野心平書「空間」



ワークショップ

◎関連イベント

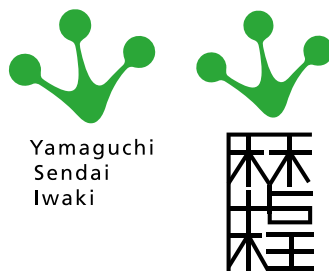
本展の関連イベントとして、トークイベント、講演、子ども向けワークショップ、上映会などを開催しました。いずれも中原中也と草野心平の蛙をテーマとした作品に焦点を当てた内容です。

トークイベントと子ども向けワークショップは、講師として、秋吉台エコ・ミュージアム自然観察指導員の田原義寛氏をお迎えしました。田原氏は、自然環境全体から蛙を考え、ご自身で田んぼを作りながら蛙の研究に携わっておられる方です。イベント当日は、心平の詩に出てくる蛙の実物を、田原氏が会場に運んでくださいました。本物の蛙を目の前にして詩を読むという稀有な体験に、子ども達のみならず、大人の方々も多くの発見があったようです。

講演は、本展の協力館である、いわき市立草野心平記念文学館の小野浩専門学芸員に、「草野心平と蛙の詩」を演題にお話しいただきました。小野氏は、心平の蛙の詩の特色と魅力を、時折歌や手品を交えつつ、軽妙な語りでわかりやすく解説してくださいました。

3館協同

本展はいわき市立草野心平記念文学館と仙台文学館との協力関係のもと開催されました。具体的には、貴重資料の貸借便宜、各館の展示担当学芸員が協力館に向いての講演会や、展示パンフレットへの寄稿、3館共通のロゴマーク作成などの協力がありました。



3館共通ロゴマーク

《関連企画展》

仙台文学館

「草野心平展」

平成20年9月6日～10月19日

いわき市立草野心平記念文学館

「『歷程』の軌跡展」

平成20年10月4日～平成21年2月15日



田んぼにやって来たえぼ

◎エッセイ

特別企画展「『歷程』と中原中也」

—カエルの詩が生まれる情景—

text=Yoshihiro TAHARA

秋吉台エコ・ミュージアム
田原義寛

2009年2月、春一番が秋吉台の草原に吹き荒れた夜、「えぼ」を探しに田んぼへ出かけた。「えぼ」とは、詩人、草野心平が詩集『第百階級』に収めた詩「えぼ」に登場させるヒキガエルのことである。この詩で、えぼがいち早く春の季節に登場するように、現実のヒキガエルたちも、春を先取りするように、活動を開始している。そうして、その活動の舞台は水の中だ。いくら春一番が吹こうとも、水温は10度を下回る寒さ。そんななか、彼らが水の中で活動するなんて、いくらなんでもそれは「水狂」と言いたくなる。しかし、カエルたちの営みは、半ば水の中にあり、残りの半分は陸上で、両棲類。えぼは、至極当然といった顔つきで、水の中に浸かっていた。

彼の行水には訳がある。春のはじまりと共に、また彼の春(恋)も水の中ではじまるのだ。詩中で、えぼが語る様に「あッ もう鳴いているな」「やつちよるな」「また鳴き出したな」「ほくたち仲間だ」は、雌を求めて、雄のカエルたちが互いに鳴き交わしているさまを表したものだ。ヒキガエルの鳴き声は外見に似合わず、案外かわいい。「キョッ、キョキョキョ」と小さく呟くように鳴く。鳴き声を大きく反響させる鳴嚢(鳴き袋)を持たないことも理由だが、概して日本のカエルは大きいものほど、声がかわいらしい。逆に日ごろよく目にするアマガエルなどは、小さな体のどこからと思うほど元気に、かしましく鳴いている。基本的に鳴くのは雄だけである。雌はその声に引き寄せられ近づいてくる。もし、近くに別の雄がいると、たちまちのうち、雌の争奪戦がはじまる。さらに、20〜30の雄が寄り集まっていると大変だ。世に言う蛙の合戦だ。「黒つばい ぼつぼつな 貧乏つくさい」「だが一番血の気の

多いはねつとばす精神をもつぼくたち「えぼ」だ」の台詞は、草野心平が、えぼたちの世界を良く覗いている言葉だと思ふ。鳴き声は控えめなのに、いざ恋の争奪戦となると、ヒキガエルたちはもうなりふり構わない。動くものになら、何にだってしがみついでゆく。他のライバルをふり落とそうと蹴つ飛ばす。雄たちには、雌を抱きしめるためのタコが指についている。いわゆる「抱きタコ」だ。それで相手をギュッとつかまえる。当事者が真剣であればあるほど、端から見るとこっけいな喜劇に見えたりするもので、時折、雄同士がひしと抱き合っている場面に遭遇することがある。闇夜を忍ぶでの恋であるし、合戦のさなかではあるし、笑うに笑えぬ情景である。きつと草野心平も、こうしたカエルたちの騒動を飽かずに眺めていたのではあるまいか。

草野心平や中原中也が詩作に耽った時代には、日常のあちこちにカエルが存在する情景があふれていたのだろう。でなければ、血肉の通った、草野心平の一連の蛙詩や、幼年の原風景から想起される中原中也の「蛙声」といった作品が生み出されるはずないからだ。特に草野心平のカエルに対する描写は、野外でカエルを研究する者にとっても正鵠をえた表現で、おどろくと同時に、文学の中でみずみずしく、えぼをはじめとするカエルたちが躍動しているさまを繰り返し読めることは誠にうれしいかぎりである。

こうした一連の優れた作品が生み出された時代がある一方、現代はカエルの詩が生まれるには、難しい時代になったと言わざるを得ない。

なにしろ、カエルの数が少なくなったのだ。環境省が2006年にまとめた日本の両棲

類の絶滅危惧リストによれば、21種類が絶滅危惧種となり、じつに3種類に1種は絶滅の危機を迎えている。その理由として、生息環境の悪化や、小規模な開発、あるいは外来種の影響が挙げられている。実際に自分の身の回りを見渡しても、うるさい程、カエルたちが鳴き交わしている場面に出会うことはめったとなくなつた。あるいは、たぐさんの種類のカエルが鳴いているように聞こえて、実はアマガエル1種類だけが鳴いているという寂しい状況も多い。本来、人間の生活が営まれる里地・里山は、カエルたちにとってもはねつ跳びたくなる天国で、草野心平が描く「青や赤や雨(以下略)」のカエルたちが春にはわれ先にはい出してゆく場所である。田んぼに水が入ると、いつせいかエルが鳴き出す。多くの生き物の命が育まれる情景をなめることは、生命の力強さと豊かさを実感し、と同時に、自然と歌や詩、物語がつむぎ出されてゆく場となるはずである。大正から昭和に活躍した先人達の作品は、見事にその素晴らしさを伝えている。

さあ一体どうやって、カエルの詩が生まれる情景を今の世にも生み出そうか。特別企画展「『歷程』と中原中也」に関わってから、思うのはそのこと。今年もすでにカエルたちの春は始まっているのである。



鳴き袋をふくらませて鳴くアマガエル

美と痛み

大和保男の陶と中原中也

平成20年10月1日(水)～平成20年12月14日(日)

美

山 口市在住の陶芸家・大和保男氏は、萩焼に新たな造形美を追究する一方で、エッセイや小説などの文筆活動にも精力を傾けています。

そんな大和氏に、中原中也の詩や芸術観に触発されて制作した新作15点を出品していただき、「言葉と造形」原初的美意識―京都「自然と創造」深谷―「冬の長門峡」の4部構成で、陶芸作品と中也の詩や芸術論、大和氏のエッセイを組み合わせた、文学と他の分野とのコラボレーション企画の一環で、「美と痛み」というタイトルは大和氏のエッセイから取られています。

言葉と造形

詩の言語表現も陶芸作品の造形も、高度に抽象化されていますが、決して具象から遊離した世界ではありません。中也は詩作において「名辞以前」から出発しようとはしますが、それは始原に立ち帰り初めて創造されるものとして言葉を使おうとしているのだといえます。大和氏の手になる陶芸作品も同様で、茶碗や壺のような日常的なものでも、常に初めて創られるものとして造形されています。

そうした両者の創作姿勢の共通性を、中也の評

論「詩と詩人」と大和氏のエッセイ「器の抽象性」(陶芸作家の造形思考)の比較を通じて紹介し、「鉄線文茶碗」と中也の「帰郷」をモチーフとした「炎彩扁壺」というふたつの陶芸作品によって示しました。

原初的美意識―京都

大正12年、16歳で京都に転じた中原中也は、古本屋で見つけた高橋新吉の詩集『ダイスト新吉の詩』を通じてダイズムを知り、友人・富永太郎を通じてフランス象徴詩を知ります。地方の少年歌人から日本の近代詩を代表する詩人への飛躍は、その経験がきっかけでした。

昭和29年、青春の混乱の中にあつた19歳の大和氏もまた京都に転じました。作陶技術の修練に励む中で美術に憧れを抱き続け、古本屋で見つけた美術全集や友人・中川泰蔵との交友によって文学や音楽を含めた幅広い芸術に触れ、ヌードや植物のデッサンに熱中します。

このパートでは、大和氏の京都時代のデッサンと一連の女性の裸像を展示して、若き日の情熱と苦悩が、タクラマカン砂漠の楼蘭遺跡で発掘されたミイラ「楼蘭の美女」や中也の詩句から得たインスピレーションを加えられ、新たな陶芸作品と

して再生されていることを紹介しました。

自然と創造

中也も大和氏も山口の地に生まれ育ちました。大和氏は中也より26歳年少で、生家の所在地が5キロほど離れてはいるものの、なだらかに続く山の稜線に囲まれ、豊かな自然に恵まれたこの空間が、両者の創造世界の源泉であつたことは間違ありません。

〈花〉(鳥)など、同じモチーフから生み出された中也の詩と大和氏の作品「彩雲文壺」「花鳥文陶笛」「裸像」を併置して、詩と陶芸それぞれの表現の違いを味わっていただきました。また、ご自身が釉薬の材料として採石していたという山口市仁保地区の硅石の存在を、「一つのメルヘン」で〈硅石〉を詩句として用いた中也も知っていたかもしれないという大和氏の仮説を紹介しました。

深谷―「冬の長門峡」

深谷には、流れる水があり、さまざまな形をした岩があり、山稜があり、季節によって色を変える木々があります。深谷は自然美が凝縮された空間といつていいでしょう。

長男、文也を亡くしたおよそ1ヶ月後、中原中也が追悼詩「夏の夜の博覧会はかなしからずや」に続けて書いたのが「冬の長門峡」でした。悲嘆と哀惜の果てに見えてきたのが、たびたび通つた長門峡の情景であり、そこにたえず孤独な自分の姿だつたのです。

このパートでは、長門峡に通いスケッチを重ね

たという大和氏が、「冬の長門峡」に触発されて制作された作品を集めました。とりわけこのたびの展示全体を代表する作品でもある「炎彩深谷譜陶笛」「生死流転」では、地を裂く震動や流れる水の力が刻み込まれたような形と、内部に横たえられた女性裸像とが、悠久の時間と人間のはかない生とを体現していて、自然の深谷に限りなく近い凝縮度をしめています。こうした一連の水指や陶笛を深谷を散策するようにめぐっていただけるとう配置し、「冬の長門峡」の自筆原稿(写真)とともに鑑賞していただきました。

関連企画として、大和氏と斉藤武男氏(東京国際ガラス学院学院長・秋市文化協会会長)による公開対談が行われました(平成20年11月7日於・ニューメディアプラザ山口)。また、出品された陶芸作品の図録が大和氏によって制作され、11月1日に刊行されました。



炎彩深谷譜陶笛「生死流転」

中也の兄弟たち

平成20年12月17日(水)～平成21年4月19日(日)

兄弟

その仕事の一端を紹介しました。

五男・呉郎

呉郎は長崎医科大学を卒業し、終戦後、湯田で父・謙助の没後休業していた「中原医院」を再開します。しかし向学心のためか、2年ほどで閉院すると、長崎大学風土病研究所に入所、細菌学を学びます。

その後、東京の国立多磨全生園や静岡の国立駿河療養所などハンセン氏病院で長く働き、日本郵船の船医となつて世界各国を巡つたりもしました。昭和45年には、茨城県河内村(現河内町)に赴き、村唯一の医師として診療に奔走しました。

また、医師としての仕事の傍ら、文学に親しみ療養所の機関誌に小説など多数の作品を発表しています。

ここでは、呉郎の詩集『煙の歌』や、中也を描いた伝記『三代の歌』直筆原稿、療養所の機関誌などから、医師と作家という呉郎の2つの顔を紹介しました。

六男・拾郎

拾郎は早稲田大学卒業後、幼少の頃兄弟で遊んだハーモニカの道に進むことを夢みましたが、経済的な事情から断念。終戦後は呉郎の経営する中原医院を事務員としてサポートします。その後、山口地方裁判所、朝日広告社など会社勤めをしながらも、ハーモニカへの想いは断ち切れませんでした。

昭和52年、長いサラリーマン生活を終えた拾郎は、59歳から再び本格的にハーモニカの練習に取り組みます。それからの活躍はめざましく、国際ハーモニカコンテストで優勝、中也没後50年記念行事で演奏するなど、着実にハーモニカ奏者としての名を上げてゆきます。その後、東京へ

中也の下には男ばかり5人の弟たちがいました。上から垂郎、恰三、思郎、呉郎、拾郎。そのうち、垂郎、恰三の2人は中也より早く亡くなり、その死の衝撃は中也を詩作へと向かわせます。

一方、思郎、呉郎、拾郎の3人は中也より長く生き、兄とは異なる、それぞれの道を歩みました。この展示では、中也が詩を書くきっかけともなった弟の存在、また「詩人・中原中也の弟」であると同時に、自分自身を生きた弟たちの業績を紹介しました。

展示1 中也と弟たち―垂郎・恰三―

次男・垂郎

(通称あるう)

中也のすぐ下の弟・垂郎は、大正4年、わずか4歳でこの世を去りました。中也が晩年に綴った「詩的履歴書」の記述からは、詩人・中也誕生のきっかけに、幼い弟・垂郎の死があったことがわかります。垂郎が亡くなったとき、中也7歳。母・フクによれば、当時中也は垂郎のために花を摘み、ひとりりでよくお墓参りに出掛けたそうです。

三男・恰三

三男の恰三は昭和6年、外傷性肋膜炎を煩い、19歳という若さで亡くなります。長男でありながら家業を継がず、詩人になった中也の代わりに、医者になろうと努めた恰三。日本医科大学に入學してまもなくのことでした。「医者にならなうち

は死にたくない」と病床で繰り返したという恰三の死は、中也に大きな衝撃を与えます。中也はこの後、やりきれぬ想いを数々の追悼詩に託しました。

ここでは、「詩的履歴書」原稿、恰三の身を案じた中也筆フク宛書簡、自伝的小説「亡弟」原稿などから、早世した2人の弟と中也との関係を紹介しました。

展示2 中也の弟たち―思郎・呉郎・拾郎―

四男・思郎

思郎は京都帝国大学(現京都大学)を卒業後、山口県の企業に勤め、早世した兄たちの代わりに中原家の当主となりました。昭和30年、42歳のとき、同志らと現在も続く地方紙「長周新聞」を創刊。以後、ジャーナリストとして活躍します。また、地元新聞に小説やエッセイなどを投稿し、文筆家としても活動しました。

後年、その才能は兄・中也の研究へと注がれます。中也の弟として在りし日の兄を語り、また一人の研究者として中也詩を読み解いて、「兄中原中也と祖先たち」や「中原中也ノート」など、多数の著作を遺しました。

ここでは、思郎の小説『白い牛』や、当時「中原中也全集」を手がけていた角川書店編集者に宛てた直筆の書簡、中也にかかわる著作の数々から、

と活動の場を広げ、若き日に果たせなかった夢をついに実現させました。

ここでは、拾郎が実際に使用していたハーモニカや直筆の楽譜などから、音楽にかけた拾郎の想いを紹介しました。

展示3 兄弟をつなぐもの

―詩誌「詩園」創刊―

昭和12年、中也は帰郷を望みながらも、30歳にして鎌倉の地で亡くなります。そのとき、思郎24歳、呉郎21歳、拾郎19歳。「詩園」は呉郎が翌年、鎌倉から持ち帰った中也の遺稿をもとに、和田健氏をはじめとする山口の若い詩人たちと始めた同人誌です。そこには、中也の生前未発表作品のほか、思郎や拾郎も時折文章を寄せました。

一冊の誌面に並ぶ兄弟の名前。中也が見ることはかありませんでしたが、ここでは、中也の死後「詩園」に発表された兄弟たちの作品を紹介しました。



展示風景

中

原呉郎（以下中原）先生は、一九五五年五月から一九六一年六月まで国立療養所多磨全生園（以下全生園）に在職された。その間の創立五〇周年記念に当たると一九五九年には、医局の総勢は園長以下一八名、現在すでに一三名が他界、残る五名のうち何とか元氣（？）なのは、大平馨（耳鼻咽喉科）先生と私（形成外科）の二人だけである。中原中也記念館が何を懸かりに私を探り当てたのか知らないが、中原先生は全生園で半年ほど先輩というだけで、公私ともに付き合いらしいものもなかったが、高名な中也の弟くらいはいつか耳にしていた。丸顔の童顔で、看護婦たちが「ゴロちゃん先生」と陰で言っていたのはすぐ思い出したが、これではどうにもならないと大平先生にも尋ねてはみたものの、これといった思い出はないようだった。

結局のところ、『中原呉郎追悼集』（中原ふさえ、一九七六年、『海の旅路 中也・山頭火のこ」と他』（中原呉郎、昭和出版、一九七六年）、「多磨」多磨全生園患者自治会機関誌）、「山椒」（駿河創作会山椒同人）など、国立ハンセン病資料館図書室所蔵の資料に頼るほかなかった。もちろん私には文学的センスなど全くないから、一通り目を通じたあと、中原先生の身の上にかけていたことや、心のうちをのぞかせているようなところを拾い出し、評論ではなく医学論文の総説まがいにまとめてみることにした。

中原先生が全生園に勤務したのは、長崎医大同窓生の高橋俊一郎先生（全生園には一九五二年七月から一九五九年六月）の勧めというが、同先生の話（高橋俊一郎「早逝の友に寄せる」『中原呉郎追悼集』一二頁）では、中原先生自ら来園して久闊を叙するとともに就職を望んだ由である。

全生園で中原先生の手術を受けた野谷寛三

さんは、術前に「中原先生はヤブだから、ほかの医者頼んだら」と忠告されたらしい（野谷寛三「中原呉郎先生を悼む」『多磨』一九八一年二月、二六頁）。確かに四年ほどの軍医の経験では小外科がせいぜいだったろう。それでも野谷さんが中原先生に手術してもらったのは、技術よりも人柄にひきつけられていたからに違いない。それでも……という一言に、中原先生への強い敬慕の情がうかがえる。前に述べた「ゴロちゃん先生」の愛称も親愛の意であって、

◎寄稿

中原呉郎先生のこと

嫌みや蔑みの響きは全くない。
中原先生が遺された作品のうち、「桃庵覚書」

「海の旅路」一〇〇頁は「共済文芸」に、「紫陽花」同二八頁は「サンデー毎日」に入選しているが、それらはそれとして、中原先生がまさに人間であり医者だったことを彷彿とさせる小説が一つある。

「山椒」（創刊号、一九六四年）に発表された「生の頂」（筆名夏原公也、四九頁）がそれだが、次

にその粗筋を書いてみる。

内科を開業している白木のもとに、貧しい故に遠方の産婦人科医にかかれぬ妊婦が、夫に抱えられて連れ込まれてきた。何とか娩出させたが早産児で重度の兔唇を合併しており、このままでは救命不能と考えて補液などを用意した。それを見た夫は、高額な処置は一切無用と断ったから、白木も生きても不幸と思いついに任す決意をする。その児は翌々日に死亡したが、すでに六人の子持ちの夫婦は、むしろ生

児の死を喜ぶかのように礼を述べて帰った。見送る白木は、これでもよかったのかという戸惑いに駆られる。働きづめの忙しい開業にも疲れ、かねて学位取得も考えていたので、この戸惑いから逃れたい。あつて大学の医局に入った。そこで、近江という動きの鈍い風采のあがらない助手と出会う。近江には凝り性なところもあって、何かに熱中しているかと思うと、疲れて二、三日も受持ちの診療を休んでしまい、教授からはとかく疎まれていた。そのために系列病院に出向させられたが、その主任清水の好意的な援助を受けながら、長続きはせず医局に戻ってしまった。白木は教授に近江の医局復帰を頼む一方、自身の生活費を削ってでも面倒をみる気になる。この近江が恋をし、彼女を遠出に誘った一週間後に、白木は彼女から手紙を受け取り、近江に癩癩発作のあることを知った。その後近江は、某医大の講師を強要され赴任するが、そこでも邪魔者扱いにされ、劇場の医務室勤務にまでおちぶれる。それも東中の悲報を新聞で知り、余りの衝撃から医務室で発作に見舞われ、金一封の情けをもって解雇された。近江は自殺を考えながら、唯一人自分の死を悲しむだろう白木に会いたいと思うが、事情を話すのが無性に恥ずかしくなった。そして「さうだ!! 船医になろう」と決心して白木を訪ねるつもりになる。白木は近江の話聞いたあと、彼を山登りに誘う。頂上に着いたとき近江は白木より岩鼻近くにいたが、突然近江が発作を起こし、白木は危うくその体を受け止める。その時、白木の脳裏にいつかの兔唇の早産児がよぎり、目の前を紋白蝶が舞う。近江がいつか言った。「木の葉蝶は、自らを守るための長い長い努力から遂に変身した。自分にもできたらなあ」と。白木は思った。木の葉蝶の思いが自然を動かしたので。それは祈りではなかったか。祈りは自由になる唯一の手段かもしれない。近江の意識が戻った。「田舎に帰って、貧しい人たちのために一緒に開業しよう」、二人は一散に山を駆け下りていった。

国立ハンセン病資料館
館長 成田 稔

teiji Minoru NARITA

「桃庵覚書」での癩や今作での精神病についての叙述はいたらないが、世の全てに見捨てられ、身も心も病み果てた人びとを逃れようのない（岩鼻）に集め、祈りもなく「救済」と信じていた医者を、中原先生は哀れんでいたかもしれない。

フランスの旅

福田百合子

日仏合同企画「中原中也―日仏近代詩の交感」の旅は、中也とランボーの縁を改めて考えさせられる機会となりました。

十二月十日濃霧の山口宇部空港を半日遅れで出発。翌十一日快晴の成田空港に総勢二十名集合。エールフランス航空機に無事搭乗、ドゴール空港着。中也が訪れたかったのに果せなかったフランスです。

十二日（金曜）パリの初日は美術館めぐり。オルセー美術館では、ラ・トゥールの人物集合図の中に、若きランボーやボードレールを発見し、出会いの喜びを先取りしました。おしゃれなレストランの昼食にも満足し、歩いてポンピドゥーセンターへ。超現代風アートの大集団に少々疲れながらも、ダダと重ねる楽しさも味わえたことです。

十三日（土曜）寒風の朝焼けの中にエッフェル塔を仰ぎ、凱旋門、ノートルダム寺院へ。クリスマス飾り付けが幻想的でした。ガイドさんおすすめのココアとクレープで暖まり、途中北

川先生の防寒用帽子の買い物に付き合ったり。

午後は小雨の中、パリ日本文化会館のイベントに参加。佐々木会長のパワーポイントによる中也紹介。フォレスト氏講演。アリュール氏、宇佐美氏対談。福島泰樹氏の抑え気味の朗読。おおか静流さんの語りと歌に向島ゆり子さんのヴァイオリンの余韻を胸に……。

十四日（日曜）いよいよランボー記念館の町へ。シャルルヴィル・メジエール市へはパリからバスで三時間半、広大な平原をひた走り、遠くに羊が白く点々と見え、路肩の残雪の斑模様と共に臉に残る風景です。市街地に入ると煉瓦造りの建物が沈み込むように静かに並び、ターミナル風の広場を持つ市役所前に出ました。少年ランボーが向うの町角を横切ったのではという錯覚に捉えらるるたまたまです。

ランボーが通った中学校（後に旧図書館として使用）に隣接して、つい先日開館したばかりの市立図書館ホールで、イベントの準備に立ち合い、その間に山口市長メッセージ代読の下読み。青年通訳さんが逐次訳の由で大安心です。会場には先日の美術館で見た人物

集合図そのままの風貌の市民の方々。立派な髭の老人や、豊かな胸のご夫人達など続々と階段席が埋まり、嬉しくなりました。

まず、シャルルヴィル・メジエール市副市長フィリップ・ソバージュ氏の市長メッセージ代読。歓迎と今後の親善への期待が、若々しい横顔から伝わってきました。山口市長メッセージには、フランスへの夢を実現出来なかった中也の思いを代弁し、今後の交流へと発展する願いが強く籠められていて、読み上げる私自身ときめいてしまいました。

フォレスト氏は欠席でしたが、会長以下、昨日のメンバーで大いに盛り上がり、最後には静流さんの振りを真似て、壇上で踊り出す人も多数（私も）でした。帰りは遅くなりましたが、夕食は日本人シェフによる和風仕立てのメニューに満足。

十五日（月曜）ランボー記念館は休館日なのに開けて下さり大感激。赤い煉瓦造りの建物は、真白な髪と髭のトゥルヌ館長によく似合う丈の高さでした。川の側の粉引き場ということで、村の水車小屋を連想していたのですが、どうしてどうして、がっしりとした元製粉工場なのです。ただ、水面に映るアーチ型の石橋の影、楊柳のような木々のそよぎは思っていた通りで、懐しく眺め入りました。

館内中央ホールで中也記念館との交歓セレモニー。中也のランボー訳詩集を献呈し、あちらからは、ランボーのバイブ姿の肖像スケッチ拡大版と書物をいただきました。操り人形で有名なご当地へ敬意を表し、山口からは大内人形を持参、喜ばれました。展示もわざわざこの日に合せて、自筆原稿や、妹への手紙など、ランボーの生涯を辿るように並べて

あり、ペン字の筆圧から、息づかいまで伝わってくるようでした。

記念館の下を流れる川に浮かべた小舟を揺らして、ランボーや周辺の子供達はよく遊んだのだそうです。「酔ひどれ船」の原点かも知れませんか。」と宇佐美先生。

筋向いにあるランボー住居の中庭。通り抜ける道の樹々の枝々。階段。部屋の床板。ランボーの少年期と青春と、そしてここからの旅立ちの姿を思い描いたりしました。

シャルルヴィルという町と、メジエールという集落が合併して現在の市になったとの説明を受けながら、朝の大通りを散策し、市内博物館ロビーでレセプション。ワインとサンディッチをいただき、なごやかな一刻でした。透明な空気の感触を肌を受けとめ、立ち去り難いシャルルヴィル・メジエール市から再びパリへ。途中、藤田嗣治礼拝堂。ランスのノートルダム大聖堂のステンドグラスは、折柄の夕映えに、くつきりと浮き上って神秘的でした。

十六日（火曜）パリ最終日は、ヴェルレーヌをはじめ、ボードレールなどの墓地巡り。地下鉄を乗り継ぎ、北川先生の講演会場の大学へ。「待つ」のテーマに学生からの得た質問があり、驚きました。

十七日（水曜）フランスの旅の終り、詩人の面影と詩心がぎっしり詰ったスーツケースを、なんとか早く整理しなくては……。

十八日（木曜）成田空港着。日本の空はなんと高く蒼いことよ。一同解散。山口宇部空港へ。中也館へ電話。

中原中也の会 日仏合同企画「中原中也一日仏近代詩の交感」

2008年12月11日(水)～12月18日(木)

フランス・パリ～シャルルヴィル-メジエール8日間の旅

旅

12月12日(金)

パリ美術館めぐり

(オプション) 講演「極東の島で詩を書くということ」佐々木幹郎(詩人、中原中也の会会長)

(会場:東洋言語文化大学日本研究センター)



12月13日(土)

(午前)パリ市内観光

(午後)シンポジウム「知れざる炎、空にゆき!：中原中也の詩をめぐって」

(会場:パリ日本文化会館小ホール)

1.前半の部

- (1) 基調講演「中原中也の生涯」佐々木幹郎
- (2) 講演「中原中也 その詩人としての二度の働き」
フィリップ・フォレスト[作家、ナント大学教授]
- (3) 対談「翻訳者にして翻訳された詩人 中原中也」
宇佐美斉[京大名誉教授]
イヴ＝マリ・アリュー[トゥールーズ・ル・ミリュウ大学助教授]
- (4) 朗読 福島泰樹[歌人、中原中也の会副会長]ほか



2.後半の部

コンサート「おおたか静流 中也のうた 日本の古いうた」

出演 おおたか静流(歌手)、向島ゆり子(ヴァイオリン奏者)



12月14日(日)

(午前)シャルルヴィル-メジエールへ移動

(午後)シンポジウム「アルチュール・ランボーと中原中也」

(会場:シャルルヴィル-メジエール市立図書館ホール)

1.前半の部

- (1) 講演「中原中也の生涯」佐々木幹郎
- (2) 朗読
佐々木幹郎、イヴ＝マリ・アリュー、関口涼子[詩人]
ジュリアン・フォーリ[コミュニケーション・スクール高校教員]
- (3) 講演「1930年代の日本におけるランボーの受容」宇佐美斉



2.後半の部

朗読と歌の夕べ

出演 福島泰樹、おおたか静流、向島ゆり子



12月15日(月)

(午前)ランボー記念館・中原中也記念館交歓セレモニー、文学散歩

(午後)ランス観光、パリへ移動



12月16日(土)

パリ芸術散歩

(オプション) 講演「昭和初年代における太宰治の位置—短編小説「待つ」を中心に」

北川透[梅光学院大学特任教授]

(会場:東洋言語文化大学日本研究センター)

Photo/参加者提供

入館者50万人達成

9月25日、平成6年に記念館が開館してから、50万人目の来館者をお迎えしました。めでたく50万人目となったのは、福岡県宗像市から来られた20歳の大学生・名越遥さん。ご友人と湯田温泉に観光に来られ、この日朝一番で記念館に立ち寄ってくださいました。

突然の取材陣の迎えやインタビューの嵐に、驚いた様子の名越さんでしたが、「おしゃれな建物。これまであまり読んだことはなかったけれど、これを機に中也の詩集を読んでみたい。」と話してくれました。

名越さんには、渡辺純忠山口市長と福田館長から、花束と中也記念館オリジナルグッズが贈呈されました。



(左から)福田館長、名越さんとご友人、渡辺市長

星になった中也

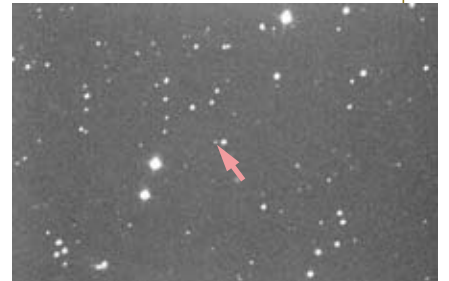
11月13日、ひとつの小惑星に「中原中也」の名がつけられました。発見者および名付け親は、久万高原天体観測館に勤務する中村彰正さん。中也と同じ山口県の出身ということで、この名を選ばれたそうです。

小惑星は平成9年に発見されたもので、軌道や周期の特定など、その後の調査研究を経て、このたび新しい小惑星として登録されました。「Chiyonakakara」。同時に、平成7年に同氏により発見された別の小惑星には、「Mitsuzakando(金子みすゞ)」の名がつけました。

どちらも約4年周期で太陽のまわりを一周します。明るさは最大でも18等級ほど。肉眼では見ることができません。そこで、望遠鏡に高感度カメラを取りつけ、長時間露出することで、ようやく撮影に成功されたそうです。

今回、発見者の中村さんに、お話を伺うことが出来ました。

「これまで私が発見した小惑星には、地元・愛媛だけでなく、ふるさと山口ゆかりの地名や人名もつけています。今回は山口県を代表する2人の詩人の名前を選びました。月や星をうたった作品が多い2人は、星に名を刻んで業績をたたえるのにふさわしいとも考えました。この命名をきっかけに、星の好きな方には山口の生んだ偉大な詩人のことに、詩の好きな方には星や宇宙に興味を持っていただければ無上の喜びです。」



作品のなかで、「星が僕になるんだ(秋)」とうたった中也も、まさか自分の名前が星になる日が来るとは、予想もしていなかったことでしょう。平成20年は国際カエル年でしたが、平成21年は、ガリレオ・ガリレイが世界で初めて天体観測をしてからちょうど400年目を記念して、世界天文年というそうです。「中也」のいる夜空に、想いを馳せてみてはいかがでしょうか。

記念館前庭で行っている屋外展示、平成21年度は「星の詩」をテーマに前後期3篇ずつ、6篇の詩をご紹介します。星にちなんだどんな詩が登場するか、どうぞお楽しみに！



久万高原天体観測館
〒791-1212
愛媛県上浮穴郡久万高原町下畑野川乙488番
松山ICから車で45分
TEL:0892-41-0110 FAX:0892-41-0822
休館日:毎週月曜日、祝祭日の翌日、年末年始。
メンテナンス等による臨時休館あり。
<http://www.kumakogen.jp/culture/astro/>

YUDA ART PROJECT 開催

11月21日〜12月27日、山口情報芸術センターの企画で、湯田温泉の街全体を使った現代アート展示が行われました。

中也記念館の前庭には、「Array(アレイ)」というLED(発光ダイオード)とサウンドを駆使した不思議な森が突如として出現。一見、人の背よりも高い黒い棒が林立している風景ですが、その間を散策すると、人の動きに反応して、ボワンとした音とともにその棒が光を発します。いつせいに白く光るなか、一本だけ青くなったり赤くなったり、時にはすべてが青く光ったりと、来館者が通るたび、非日常的で不思議な空間が創り上げられました。

制作したのは、ロンドンを拠点に活動するアーティストグループ、ユナイテッド・ビジュアル・アーティストズ(UVA)。この作品を見るために、全国各地からたくさんの方が記念館を訪れました。



- 4月23日 企画展Ⅰ「第13回中原中也賞」(～7月27日)
- 25日 第47回中也を読む会
- 企画展Ⅰ見学、最果タビ『グッドモーニング』を読む
- 29日 生誕祭 空の下の朗読会 (於 記念館前庭)
自由参加の朗読(朗読参加者22名)
パトリック・ヌジェコンサート
- 第13回中原中也賞贈呈式
(於 ホテルニュータナカ) 主催: 山口市
受賞詩集: 最果タビ『グッドモーニング』(思潮社)
記念講演「^{やまもと}倭ごころと^{から}漢ごころ
^{あきなり}一秋成と^{のりなが}宣長・中也と秀雄」講師: 高橋睦郎
- 30日 中原中也記念館運営協議会
- 5月23日 第48回中也を読む会 朗読の会、朗読CDを聴く
- 6月24日 「サーカス」(『山羊の歌』)を読む
- 27日 瀬戸内文学館連絡協議会総会 (於 ホテルニュータナカ)
- 第49回中也を読む会
- 7月25日 第5回常設テーマ展見学、「曇つた秋」(草稿詩篇)を読む
- 第50回中也を読む会
- 30日 「蛙声」(『在りし日の歌』)他、蛙関係の詩を読む
特別企画展「『歷程』と中原中也」(～9月28日)
- 8月2日 特別企画展プロムナード・トーク (及び9月27日)
特別企画展トークイベント (於 西村屋旅館)
- 10日 「心平のカエルと中也のカエル」講師: 田原義寛、池田誠
特別企画展講演 (於 サンフレッシュ山口)
- 15日 「草野心平と蛙の詩」講師: 小野浩
- 20日 特別企画展上映会 (及び9月5日)
特別企画展子ども向けワークショップ (於 湯田公民館)
「詩にでてくるカエルを見てみよう!」講師: 田原義寛、池田誠
- 22日 第51回中也を読む会
特別企画展見学、草野心平の詩を読む
「記念館職員による紙芝居上演」
(於 山口市湯田温泉観光案内所)
主催: “湯田温泉どこでも紙芝居”実行委員会
- 23日 「詩の朗読会—心も声も響かせよう」
(於 山口市米屋町商店街みずほ銀行前広場)
共催: 山口市中心市街地活性化推進室
- 31日 機関誌「中原中也研究」第13号発行
- 9月13日 公開講演Ⅰ (於 ホテルニュータナカ)
「草野心平思慕」
- 25日 入館者50万人



- 9月26日 第52回中也を読む会
「秋」(『山羊の歌』)を読む
- 10月1日 企画展Ⅱ「美と痛み—大和保男の陶と中原中也」(～12月14日)
作家本人による展示解説 案内: 大和保男
- 3日 「第17回全国山頭火フォーラム in やまぐち」関連事業
山頭火資料特別展示(～5日)
- 12日 公開講演Ⅱ「中原中也のいごころ」(於 ニューメディアプラザ山口)
講演「大都会の庇護者—関口隆克のテープ発見」
講師: 安原喜秀
講演「ダダとボンパとゆやゆよん」講師: 諏訪哲史
対談「現代作家と中原中也」講師: 諏訪哲史
- 22日 中也命日、お墓参り
- 24日 第53回中也を読む会
企画展Ⅱ見学、「一つのメルヘン」(『在りし日の歌』)を読む
- 11月6日 中原中也記念館運営協議会
- 7日 公開対談「美と痛み—大和保男の陶と中原中也」
(於 ニューメディアプラザ山口) 講師: 大和保男、斉藤武男
- 21日 湯田アートプロジェクト(～12月27日) (於 記念館外庭ほか)
主催: 山口市、(財)山口市文化振興財団
- 26日 瀬戸内文学館連絡協議会学芸員・担当者研修会
(於 山口県立美術館、山口情報芸術センター)
- 28日 第54回中也を読む会 中也詩の作曲CDを聴く会
「夕照」(『山羊の歌』)、「北の海」(『在りし日の歌』)
- 12月15日 ランポー記念館との交歓セレモニー (於 ランポー記念館)
- 17日 企画展Ⅲ「中也の兄弟たち」(～H21年4月19日)
- 26日 第55回中也を読む会
「除夜の鐘」(『在りし日の歌』)を読む
- 1月23日 第56回中也を読む会
企画展Ⅲ見学、「秋岸清涼居士」(草稿詩篇)を読む
- 2月18日 開館記念日(15周年)
第6回常設テーマ展示「哀悼の詩—愛するものが死んだ時には」
(～H22年2月7日)
- 2月27日 第57回中也を読む会
第6回常設テーマ展見学
- 3月20日 山口お宝展(中也筆習字、図画の特別展示)(～4月19日)
主催: 山口商工会議所
- 27日 第58回中也を読む会
「春の日の歌」(『在りし日の歌』)を読む
- 31日 館報第14号発行



中原中也の会

- 5月10日 昭和文学会第42回研究集会・中原中也の会第12回研究集会
(於 駒沢女子大学) 共催: 昭和文学会、中原中也の会
テーマ「中原中也への新たなまなざし」
講演「中原中也と戦争」講師: 福島泰樹
シンポジウム「モダニズムと中原中也」
パネリスト: 澤正宏、中原豊、米村みゆき
司会: 阿毛久芳、正田雅昭
- 7月31日 会報第24号発行
- 9月13日 中原中也の会第13回大会
(於 ホテルニュータナカ)
テーマ「中原中也と草野心平」
講演「草野心平思慕」講師: 立松和乎



- アトラクション ピアノ弾き語り、朗読/よしもとあい
シンポジウム「中原中也と草野心平—共鳴する詩人—」
パネリスト: 入沢康夫、傳馬義澄
司会: 阿毛久芳
- 14日 中原中也の会第9回セミナー (於 ホテルニュータナカ、中原中也記念館)
特別企画展「『歷程』と中原中也」探訪 講師: 池田誠
- 12月11日 中原中也の会日仏合同企画「中原中也—日仏近代詩の交感」
(於 フランス・パリ日本文化会館、シャルルヴィル・メジエール市立図書館、
ランポー記念館ほか)
主催: 中原中也の会、ランポー記念館、中原中也記念館
- 18日 会報第25号発行
- 25日

◎第14回中原中也賞

『先端で、さすわ さされるわ そらええわ』

川上未映子氏



©MINARICH

Chuya
Nakahara
prize

第

14回中原中也賞は、応募詩集184詩集の中から、川上未映子氏初の詩集『先端で、さすわ さされるわ そらええわ』が選ばれました。

川上氏は、第138回芥川賞を「文学界」平成19年12月号発表の小説「乳と卵」で受賞しています。

平成16年より、各々3枚のシングルとアルバムを発表しているシンガーソングライターであり、受賞詩集のタイトルとなった作品「先端で、さすわ さされるわ そらええわ」で平成17年に文筆家としてデビュー。女優としての頭角も現しており、多彩な才能を披露しています。

選考会では「従来の詩の概念をはみだした、渦を巻いて展開する力動的な語り口（選評より）が群を抜いて優れていると評価され、受賞に至りました。

図書館は象の目です。

数え切れない皺に守られて慈悲を練り込んだような暗黒の象の目なのです。それは堂々としたあらゆる球体の母親であるかのように深く深く、波うっています。その象の目には本という何十億の面が反射しあつて何億という人々の色々が映っています。思い出や意見や成就や残念が映っています。影がしゅつと消えたかと思えば音楽が鳴り、しくしくと泣き、抱きしめあい、死に別れ、企みがあり、論理があり、悔しい気持ちに死んでしまったあの晩、告白が解除され、陥れられ、復讐や、手紙を書いたりしているのです。数字の曼荼羅が一面に広げられ、虐げられた感受性その他が眠るのです。約束を交わし、各種の素晴らしさや尊敬、見えない力は語ることによつて語られ、また美しい言葉遣いに語られることによつて、洗濯婦や、芸術家や、名もない感情の行き来や営み、動物や、出来事の頬が、みるみるうちに誇らしげに、紅潮しているのです。そのいつさいが真つ黒な目の底に、ゆつくりときらめいています。ここは言葉。そして、観念の器官であります。

（「象の目を焼いても焼いても」より）

読み手を、イメージの世界へぐんぐん引き込んでゆく、強い力を持っている川上氏。様々な芸術分野の境界が曖昧になってきている現在、小説と現代詩の世界を自由に行き交い、言葉による表現者として、今後も多くの作品が生み出されることでしょう。

◎平成21年度 記念館関連行事予定

2009年4月-2010年3月

| | | | | | |
|-------|---|-------|-------------------------------|----------------------|----------------------------------|
| 4月22日 | 企画展Ⅰ 「第14回中原中也賞」 （～7月20日） | 7月24日 | 特別企画展「月光とメルヘン」 （～9月27日） | 10月22日 | 中也命日・お墓参り |
| 4月29日 | 生誕祭 空の下の朗読会 （於 中原中也記念館前庭） （無料開放日） | 9月5日 | 中原中也の会第14回大会 | 12月16日 | 企画展Ⅲ 「収蔵資料展」 （～平成22年4月18日） |
| 5月5日 | こどもの日（無料開放日） | 9月6日 | 中原中也の会第10回セミナー | 平成22（2010）年 2月10日 | 第7回常設テーマ展示 「『山羊の歌』まで」(仮) |
| 5月30日 | 中原中也の会第13回研究集会 | 9月30日 | 企画展Ⅱ 「湯田温泉物語」 （～12月13日） | | ※日程等、変更の場合もございます。 |

中原中也記念館 館報 【第14号】平成21年3月31日 表紙写真 | 原稿「三月の風」

発行◎ 中原中也記念館 〒753-0056 山口県山口市湯田温泉1丁目11-21 TEL083-932-6430 FAX083-932-6431 E-mail:chuyakan@c-able.ne.jp http://www.chuyakan.jp/

環境に配慮し、用紙には再生紙を使用しています。印刷インキは植物性大豆油インキを使用しています。